

『日本沈没』第一部

小松左京著／小学館文庫

『日本沈没』第二部

小松左京、谷甲州著／小学館文庫

第一部は1970年代、所謂「高度経済成長期」の末期に書かれ、第二部は第一部から33年経つポストバブル時代に書かれている。

私は、第一部を札幌オリンピックの後、中学生の頃に読んだ。本当にベストセラーで、買いに行っても店頭には上巻が見あたらず、仕方なく下巻から買ったことを覚えている。当時の最先端の地球物理学の知識を援用し、日本列島が数年という地球物理学的には極めて短期間でプレートごと日本海溝に引きずり込まれていく過程が記されており、「フォッサマグナが裂けていく」という台詞が印象的だった。SFが好きで、ハードSFを期待して読み進めた自分にとっては人間ドラマが多すぎちょっと当てが外れた気がしたが、それはまだ私が幼なかったからだろう。

今読むと第一部に登場する科学技術は、少々古くさく見えるかもしれない。しかし、当時は、人類が月に到達してまだ数年という時期であり、GPSもスーパーコンピュータも存在していなかったのだ（勿論、携帯電話、PC、インターネットも無い）。学生諸君にとっては、第一部を読むことによって、ご両親の若い頃の技術レベル、社会の雰囲気（1970年代は何だか社会が埃っぽかった）、世界情勢を知ると共に、この30年あまりの間の凄まじい技術の進歩を知る手掛かりとなるだろう。

第二部を読んだのは昨年。刊行から少し時間が経ってからであった。第一部のようなベストセラーにはならなかったようだが、第一部で日本列島の最後を看取った登場人物達のその後、国土を失って世界へ散った日本人たち、日本沈没にとどまらないその後の地球規模の変動、そしてラストシーン、は十分に読ませるものだった。第一部に比べると何となく暗い雰囲気を感じたのは、小松左京氏が原案で執筆したのが谷甲州氏だったからだろうか。

第二部において、世界に散った日本人はなお活力を失わず、分散国家として政府を維持し、地球シミュレータを開発して地球の未来に関する大規模シミュレーションを続け、そして驚愕の未来予測が…。となるのだが、これ以上はネタバレ

になるので自分で読んで欲しい。読みながら、最近は少ないデータから全体像を復元するシミュレーション技術も発達しつつあるので、それを使えば作品中でのシミュレーションの精度も上がったろうにな、と思うのは、コンピュータ化学をやる人間のしょうもない感想か。

SFとして分類されるが、これは小松左京氏の「日本人論」として読んで良いだろう。第一部、第二部共に日本の民族と歴史への愛惜の情の溢れる作品であり、もしこれを海外留学の前に読めば、背筋を伸ばして国際線の飛行機に乗り込む気になるだろうし、海外に長期滞在しているときに読んだら、胸が締め付けられるような気がして辺り構わず泣き出してしまったりかもしれない。できれば、海外に出る前に読んで欲しい。

執筆者紹介

内田 希

物質・材料系准教授。専門領域は、無機化学、量子化学。

【書名】 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『日本沈没 第1部』上・下巻 小松左京著 小学館文庫 2006年 1,200円
『日本沈没 第2部』上・下巻 小松左京、谷甲州著 小学館文庫 2008年
1,260円

ブックガイド目次へ